

令和元（2019）年度海外研修参加者の英語力伸長度調査・報告書

グローバル教育センター

はじめに

本学国際教養学部では、カリキュラムの一環として、基本的に2年生は全員、2年次後期に海外研修（留学）に参加します。研修先大学は、英語圏5カ国（アメリカ、カナダ、イギリス、オーストラリア、ニュージーランド）に15大学あり、研修中、学生は各大学のESLプログラムに所属し、フルタイムの学生としてそれぞれの英語力に合ったクラスで授業を受ける一方、1学期間を通して、自由研究論文を含む、ポートフォリオ（15,000ワード以上で構成される課題集）の作成が課されます。

海外研修の主たる目的は以下の4つです。

- 1) 異なる言語・文化・価値観を理解することができる能力（異文化理解力）の育成
- 2) 異なった文化を持つ人々と建設的及び協調的人間関係を構築することができるコミュニケーション能力の育成
- 3) それらの能力を基礎に課題を発見する力（課題発見力）の育成
- 4) 自分なりの結論を導き出すクリティカル・シンキング力の育成
- 5) 実践的英語運用能力の育成

今回、令和元（2019）年度に海外研修に参加した学生を対象に、上記目的中の「5）実践的英語運用能力の育成」の成果を測るべく、その英語力の伸長度を、TOEIC試験（Listening and Reading）の得点を指標として検証しました。

1. TOEIC（L&R）平均点の推移

（表 1. TOEIC（L&R）データ）

留学期間	2019年8月から2019年12月（約4ヶ月）		
学生数	67名（派遣時2年生）		
留学先大学	11大学（英語圏5ヶ国）		
TOEIC（L&R）の成績	留学前	留学後	留学前後の伸び
全体平均点（R+L）	482点	572点	90点（18.7%）
R(eading) 平均点	189点	231点	42点（22.2%）
L(istening) 平均点	293点	341点	48点（16.4%）

以下が上記データを図式化したものです。

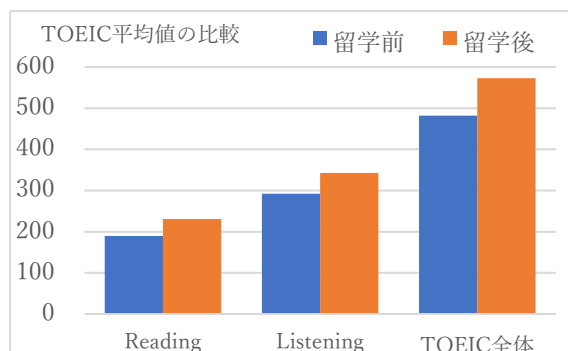


図1. TOEIC 成績分布 (留学前、留学後)

2. 分析

4ヶ月という短期の留学ながら、学生のTOEICの平均点(全体)は、留学前の481点から留学後は571点と、留学前後で90点(18.7%)伸びています。そのうち、Readingの点数は、留学前の189点から留学後の231点と、42点(22.2%)、また、Listeningの点数は、留学前の293点から留学後の341点と、留学前後で48点(16.4%)伸びています。英語を母国語とする国に住むことによって、いわゆる「英語漬け」の状態での日常生活を過ごすことになることから、通常Reading力よりListening力の向上が顕著となる傾向があるなか、令和元(2019)年度の学生については、その差はほとんどなく、Reading力の着実な向上がみられます。これは、本学が海外研修単位取得のために学生に課しているポートフォリオを作成するためのエッセーや研究論文の執筆が大きく貢献しているものと考えられます。

海外研修に起因する英語力の伸長度をみると、学生の入学時からの英語力の伸びを検証することは有益と考えます。以下に上記図1に学生の1年次のTOEICの平均値を加えた図と、そのデータ表(含、一定期間における伸び率等)を示します。

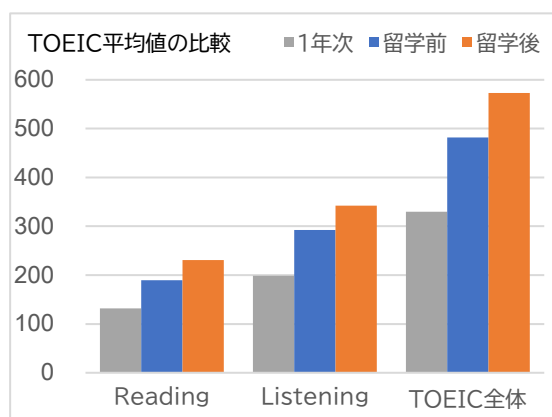


図2. TOEIC 成績分布 (1年次、留学前、留学後)

(表 2. TOEIC(L&R)データ)

期間	2018年4月から2020年4月(2年/24ヶ月)					
学生数	67名(現3年生)					
TOEICの成績	1年次 (4月)	留学前 (2年次7月)	1年次から 留学前まで (15ヶ月)の伸び	留学後 (3年次4月)	留学前後 (約4ヶ月)の伸び	1年次から留学 後まで(24ヶ月)の伸び
全体平均点 (R+L)	330点	482点	152点 (46.0%↑)	572点	90点 (18.7%↑)	242点 (73.3%↑)
R平均点	132点	189点	57点 (43.1%↑)	231点	42点 (22.2%↑)	99点 (75.0%↑)
L平均点	198点	293点	95点 (48.0%↑)	341点	48点 (16.4%↑)	143点 (72.2%↑)

上記「表 2. TOEIC(L&R)データ」からわかるように、学生の TOEIC の点数は、入学時から 2 年次 7 月までの 15 ヶ月間で平均 152 点上がった一方、留学期間の 4 ヶ月では平均 90 点上がっています。本学国際教養学部では 1 年次からほぼ全ての授業は英語で行われているため、その学修成果として TOEIC で測定される英語力の向上がみられるのは当然と言えますが、その得点の伸び(向上率)を本学キャンパスでの学修期間と海外研修期間で比較すると、海外研修期間での伸びが大変大きいことがわかります。

おわりに

学生の海外派遣の重要性が声高に叫ばれる昨今、本学では開学以来、国際教養学部の学生を、原則全員 1 学期間、英語を母国語とする 5 カ国にある協定校(現在は 15 大学)に派遣してきました。どの国、どの大学に行ったとしても、学生にはホームステイを生活環境として、英語の授業以外にポートフォリオの作成が課され、その作成にあたっては積極的に現地の文化を知り、また、地域の人々と交流しなければなりません。そして、その意義や成果を学生自身が実感していることは帰国後の聞き取り調査からわかっていますが、その成果全体の客観的可視化については十分とは言えません。冒頭に記した海外研修の目的(1)異文化理解力、2)コミュニケーション能力、3)課題発見力、4)クリティカル・シンキング力、5)実践的英語運用能力、等の育成)達成度の客観的測定の一環として、5)の実践的英語運用能力については TOEIC の点数を測定基準とし、本報告書では、令和元(2019)年度に海外研修プログラムに参加した学生の成果を検証しました。その結果、海外研修プログラムが英語運用能力向上において一定の大きな効果があることが判明しました。今後とも同様の検証を継続し、さらに効果的な海外研修プログラムの構築を目指します。

なお、異文化理解力、コミュニケーション能力等、他の成果の検証については、来年度より BEVI(Beliefs, Events, and Values Inventory)分析ツールを利用して行う予定です。